

日本学校音楽教育実践学会 第30回全国大会

2025年8月23日（土）、24日（日）の二日間にわたって、大阪教育大学天王寺キャンパスにて、日本学校音楽教育実践学会第30回全国大会が開催されました。北は北海道、南は沖縄より全国各地から約180名の参加がありました。本学会は音楽教育実践学の研究を推進していることから、参加者の多くは小学校や中学校などの学校教員が多く、日々の実践を研究的にとらえ直し、実践研究の交流をするなど、活発な議論が繰り広げられた大会となりました。

セミナー「領域横断的な視点が切り拓く音楽教育の新たな世界」

その3 一文楽にみる近世の社会と芸能

久堀裕朗氏（大阪公立大学）、竹本織太夫氏（太夫）、鶴澤清堯氏（三味線）



今回のセミナーでは、大阪を起点に発展した人形浄瑠璃文楽について、日本近世文学の研究者である大阪公立大学の久堀裕朗氏、NHKのEテレ『にほんごであそぼ』への出演など多方面にわたって活躍されている竹本織太夫氏（太夫）、鶴澤清堯氏（三味線）の3名を講師に、講演・実演・ワークショップ・クロストークが行われました。最初の講演では、久堀氏より大阪という土地に根付きながら発展してきた文楽の歴史、世界にも

稀にみる人形の動きや浄瑠璃の語りの魅力が解説されました。久堀氏の解説につなげて、竹本織太夫氏、鶴澤清堯氏による世話物と時代物の演目が実演され、その後、参加者と共に太夫の語りを体験するワークショップが行われました。ワークショップでは、言葉の意味と江戸時代の大坂弁の抑揚をふまえて、間を入れたり、抑揚をつけたり、音色を変えたりして語る楽しさを体験することができました。最後のクロストークでは、三者それぞれの立場から、文楽の面白さ、音楽との関係、さらには大阪で発展してきた文楽であるからこそその楽しみ方などが語られ、人形浄瑠璃文楽の魅力を詰めこんだ2時間でした。



課題研究「生成の原理に基づく音楽科授業における教科内容の体系

—その4 教科内容における技能的側面の位置づけ—

課題研究では、これまで教科内容の「形式的側面」「内容的側面」「文化的側面」に焦点を当てて研究を進めてきましたが、4年次の今年は「技能的側面」に焦点を当てた実践発表となりました。小学5年歌唱《スキーの歌》と中学2年鑑賞《フーガ短調》の授業実践の報告に加え、その実践の支えとなった歌唱の技能および鑑賞の批評能力に関する理論的見解からの講演がありました。音楽科の授業において永遠の課題ともいえる「技能」ですが、例えば実技テストなどで技能を単独で見取るのではなく、「技能的側面」がいかに子どものイメージや思考と結びついているのかを把握することがキーポイントになるのではと考えさせられた発表となりました。



参加型教材実験プロジェクトⅠ 北陸支部企画

「歌唱指導に向けた『文化的側面』の捉え方—歌唱共通教材《夏の思い出》」



北陸支部のプロジェクトでは、現行学習指導要領で示されている「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」を育成するための「文化的側面」に焦点が当てられました。「文化的側面」を扱った先行研究には作曲家の出身地や生年など「文化に関する情報」と「音楽の性質を感受するための論拠となる文脈」の2つの概念があり、その混在について問題提起されました。

中学校歌唱共通教材《夏の思い出》を事例に、9～10小節の「水芭蕉の花が咲いている」の「歌い方」と論拠を、強弱の変化と8分休符の休み方をもとに、ワークシートの楽譜に書き込む活動が設定されました。実験場面では、作詞者の江間章子が「夢と希望」について語っている新聞記事（読売新聞2000年6月6日）と教科書の2点を提供されたグループと、教科書のみグループとに分けられました。新聞記事の提供を受けたグループからは、戦時中に抱いた気持ちを論拠とする歌い方の提案があり、文化的側面の2つの概念について再発見する時間となりました。



参加型教材実験プロジェクトⅡ 九州沖縄支部企画

「声の表現の可能性を探る—詩(言葉)・色とのコラボレーションから—」



九州沖縄支部プロジェクトでは参加者の机の上に国語科教科書に掲載されている3つの詩（低学年、中学年、中学生対象）とクーピー色鉛筆が提示され、参加者は3つの詩の中から1つを選んでグループとなりました。そして「選んだ詩をどんな風に読みたいか」という問いから、声の表現の探究が始まりました。

参加者は、色々な読み方をしながら、詩のことばを、色や字体、大きさや位置を考え、自由自在にシートに書いていきました。そして、そのイメージを「声」という媒体を

使って探究していきました。高い声や低い声、やさしい声や明るい声を出しながら、声を重ねてみたり、ずらしてみたり、間をあけてみたりと没頭しました。一人一人異なる声の素材を活かしながら、声と言葉と色のコラボレーションを楽しみました。

発表場面では、同一の詩で、異なる表現を味わったり、大胆な身体表現に思わず笑顔がこぼれたり、詩の情景を楽しんだりするなど、互いの表現の工夫に耳をすましている姿がみられました。教科等横断的な視点からも、教材の魅力について考えることのできる時間になりました。

